

五五五

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、**春(三〜五月)**、**夏(六〜八月)**、**秋(九〜十一月)**、**冬(十二〜二月)**の季節ごとに再編集しました。栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。

栗野・徒然日記

其の式・春



それでは一筆!!

2021.3.1 お蚕まつりの記憶



かつて、毎年3月1日に催されていた千数百年の歴史があるとされる美江寺観音(市民会館北側)の美江寺まつり、別名お蚕まつりが幕を閉じて早や10年余。遠方からも多くの人々が訪れたものです。養蚕が衰退したこともさることながら、境内で売られた土鈴(西の横綱と言われるほど全国的に有名であった)や、養蚕の吉凶を占う「猩々投げ」の杓が製作ができなくなったことが背景にあります。春の訪れを告げる祭りの日は、なぜか冷え込んだものですが、今日は比較的暖かいですね。それにしても、伝統を継承することは本当に難しい。地域の催事も、随分姿を変えつつあると伺います。一つの催し事にも、多くの人々の支えがあります。

2021.3.3 市松人形



亡き母が、ひな祭りのたびに雛人形と一緒に飾っていた何体もの市松人形。母の幼少時分の大正末期から昭和初期のものと思われます。当時は着せ替え人形として裸で売られていたらしく、着物は手作り感満載。髪の毛はにかわで接着されていますが、最近では、にかわは使わないそうで、必要に応じて接着剤で補修すれば良いと、人形店の方の話。今は、高価な市松人形も、昔は庶民的な子どもの玩具だったのですね。3月3日が訪れるたびに、母を思い出すのは私だけでしょうか？

2021.3.5 汐汲



▶ 収納箱に敷き詰められていたのは、昭和29年発行の「東海夕刊」

ひな人形や市松人形と一緒に飾られていた人形さん。歌舞伎や舞踊で演じられる「汐汲」。恋人を思い、しつとりと踊る女性。「幸せをいっぱい汲める」桶を担ぐ、まさに縁起担ぎの願いが込められています。ところで、収められていた箱に、色褪せた新聞が敷き詰められていました。古新聞を読み始めて、片付け作業が滞ることってアルある。昭和29年の「東海夕刊」(岐阜タイムス発行・今の岐阜新聞)。ベビーブームを受けて、県内で学校建設が活発化との記事が掲載されています。その後、市内でも廃校や統合された学校も少なくありません。私が通った小、中学校も、そして校歌も、今では思い出だけに。

2021.3.6 花ごよみ・サンシイ(サンシュユ、サンシュ)



冬ごもりしていた生き物が動き始める啓蟄、蟻を見つけました。すっかり春めいて来ました。黄色の小花をたくさんつけるサンシイの木も今が盛り。“庭のサンシュウの木♪”で始まる宮崎県のひえつき節。これは、サンシイではなく、山椒の木のことらしい。壇之浦の戦いの頃の民謡らしく、江戸時代に伝わったサンシュウの木を指すものではないからとのこと。それにしても、何故か春の花は黄色(岐阜弁では「きーない」)が目立ちます。タンポポしかり。花にはどうして色がある？チョコちゃんの番組に出てきそう、と思いきや、実際に放送されていました。虫を呼び寄せ受粉のお手伝いをしてもらうため、そして、花色がいろいろあるのは虫の好みバラバラだから、が答え。啓蟄のあと、虫が活動し始めるころに一斉に咲き始める理由もその関係かな？その上、春は黄色を好む虫が多いのかな？



▲クロッカス



▲ミニラッパ水仙



◀西洋リュウキンカはとても丈夫でよく増える。在来種が、5~6月に咲くのと違い、草も茂っていない2月頃から、そこそこ大きな花を咲かせます。鳥羽川の堤や水辺に植えると、きれいだと思うけれど、外来種だからなあ。

2021.3.10 春風に吹かれて

長良川は、雪解けの水で少し増水しています。伊吹山も青い山肌が見えるように。

春の風…まだ寒い時期から花開いた雪割草(写真上)やミヤマカタバミ(写真下)の白い花も心地良さそうに吹かれています。綿毛に包まれたヤシャゼンマイの芽が力強く伸び始めました。でもあまり強い風は、まだ願い下げ。加えて、数日前からヒノキ花粉かなり飛んでいます。NHKの“ためしてガッテン”で、ワセリンを鼻穴(花穴ではありません)の入り口に塗ると楽になると、以前放送していましたが、これだけひどいと…？



▶ヤシャゼンマイも力強く芽吹き始めました

2021.3.11 祈り



あの日、津波のニュースを聞いたとき、私たちは深刻に捉えていただろうか？「これからもっと悲しみが増して来るでしょうが頑張って下さい」という海外からのメッセージがテレビで流れたときも、その意味を理解していただろうか？ あれから10年、災害大国にも関わらず、幾度となく見舞われた経験が、生かされてきたでしょうか？ 幼馴染の彫刻家、中村淳子さんの個展“祈りにたくして”が、金園町のギャラリーいまじんで開かれています。10年目の節目にと準備をしてきた作品の数々が心に語りかける。

災害を風化させることなく、明日への道標になると良い。

◀彫刻家中村淳子さん。そんなに時間が経ったと思わなかったけれど、幼馴染と10数年ぶりの再会でした。

2021.3.13 多様性



明治時代には西洋から多くの言葉が入ってきました。これを漢語的に表現し直した翻訳語には、例えば、自由(liberty)、社会(society)、個人(individual)などがあります。我が国にはない概念だったので、翻訳したからと言ってなかなか理解はされなかったみたいです。

平成10年代、サステナビリティ、ダイバーシティなど、社会課題の所在や解決策を示す用語が頻繁に用いられるようになり、それぞれ持続可能性、多様性などと訳されていました。中には、グローバル(グローバルとローカルの造語)も生まれました。まちづくりは、まさに多様性が良い結果を生み出すと言われます。この程とりまとめられた岩野田北地域まちづくりビジョン(単に計画というより、もっと幅広い意味がビジョンという単語には込められている気がします)には、まさに地域の皆さんから寄せられた多様な意見が反映されています。多様な意見も目的は一つ、「より良いまちにしたい」。

みんなでビジョンを共有し、1人の100歩より、100人の1歩…みんなの協働が欠かせません。

2021.3.17 いつの間に?!



いつの間にやら、自宅近くの畦道に土筆が伸び切ってる。市内の桜の
開花宣言が昨日発表。観測史上、1989年と並び最速とか。いち早く鶺鴒
桜(金華山岐阜護国神社境内)は、すでに満開。早咲きのエドヒガンザク
ラで、鮎漁の豊漁を占ったとか。 県内の新型コロナ緊急事態宣言は解
除されたものの、人込みでの花見は厳禁。遠くから眺める春よ。 写真
は霜に耐え、たくましくも可愛げな土筆2本。

2021.3.18 蛙初めて鳴く

黄鶯睨皖(うぐいすなく)の候は、立春過ぎ頃を指しますが、今日、アマガエルが庭で初鳴
き。二度ほどグワグワと鳴いて、それきり。姿を見ることはできませんでした。一番花
を咲かせたツルニチニチソウの絡む柵の竹の空洞に上から潜り込んで鳴くことがあり、辺り
一面に木霊します。それにしても、初夏になると子ガエルが沢山“がいわる”(方言で孵化し
てウジャウジャいる様子を言いますが、使う人は少なくなっていますね)。アマガエルは水た
まりでも産卵するそうですが、敷地内にそんな場所の心当たりはありません。摩訶不思議。
ちなみに、孵化するとオタマジャクシになるわけですから、子ガエルの場合、正確には、
“がいわる”というのとは適切ではないのかも。

2021.3.18 花ごよみ・カタクリ



山県市のスーパーTから車で北西に数分走った山
の北側斜面一面に、カタクリの花が咲き始めまし
た。半分ほどの株がまだ蕾ですが、それも含めて十
分に楽しめます。住宅地がすぐ北側に広がって
いて、10数年ほど前には、自治会が看板を立てて、守
っていた記憶があります。今は、山県市が看板を設
置し、以前より広く見通せるようになった気がしま
す。その意味では、見応えがありますが、地域の保
全活動と協働してほしかったかも。[岐阜市のアダプ
ト・プログラム](#)には、環境保全型のタイプもありま
す。栗野には、アダプト・プログラムが使えるそう
なスポットがありませんか?



2021.3.19 春凝縮



採ってきた土筆(ツクシ)を調理。天ぷらよりも卵とじが好きです。苦みもたまりません。犬の散歩のない辺りを探すのが一苦労。子どもの頃、父と一緒に高富まで走っていた電車に乗って、土筆を探しに来たことがありました。結局、土地勘もなく、見つからず残念な思いがしました。高富線に乗ったのはこれ一度きりでした。写真の上は、芹(セリ)。下水道が整備されたとは言え、野生のものはためらってしまい、スーパーVで買いました。実は、これまでに芹を食べた記憶がありません。値段も98円と安価だったので、興味本位で買いました。鍋にしたところとても美味しい。パクチーは苦手だけど。きりたんぽ鍋には、根の付いたセリを入れるそうですが、この辺りの郷土料理にセリを使った品は、あまり聞きません。私が知らないだけ？

2021.3.21 花ごよみ・ユスラウメ



まとまった雨に、花開いて間もないユスラウメの小さな花弁が散り始めています。

漢字で山桜桃と記されるように、桜の開花宣言の基準となるソメイヨシノより早く開花します。

梅雨のはじめには、真っ赤に熟れた果実が鈴なり。ジャムにしても美味しい。

2021.3.22 遊び心



まちづくりのテーマは様々。道路の整備や命を守るなど、とても重い課題もあります。まちづくりは、絶え間なくよどみなく流れる川に例えられます。バーンアウトしないためにも、遊び心も持ちながら。「1人の100歩より、100人の1歩」とは、岐阜市いえ全国のボランティアの草分けとも言えるNMさんの言葉。みんなで、できることから、進めていきましょう。写真は、お隣の山県市役所前の「みんなの元気広場」で木登りする子どもたち。

2021.3.24 やっぱり竹筒の中に



3月18日の「蛙初めて鳴く」に記した、竹柵の空洞にアマガエルを発見。しかも、2匹が背中合わせに寄り添っていました。カメラを近づけると後ずさり。井の中の蛙ならぬ竹筒の中の蛙です。

話は変わって、コロナ禍で外出や交流機会が減少しています。同居家族以外との交流頻度が週1回未満で、かつ、外出する頻度が2~3日に1回程度以下の閉じこもり傾向にある高齢者では、閉じこもり傾向のない高齢者に比べて6年後の死亡率が2.2倍高くなると調査結果があります([東京都健康長寿医療センター](#))。

高齢者にとっては深刻な話です。陽気も良くなります。せめて散歩に出かけましょう。

明るい時間帯で、くれぐれも車に気を付けて。

2021.3.25 自然の恵み(旬の食べ物)が人びとを潤す Kさんの投稿



自然が生み出す新しい芽生え、梅の香しき開花から、桜花吹雪舞うと共に草木の息吹、春の訪れを楽しみながら我々は新しい季節の到来を感じています。

飛驒に育った私は春がくると、幼き頃に気持ちがあきうきしたことを鮮明に思い出します。それはきっと梅や桜の花を見たかったからではなく、ただ、冬の深い雪に覆われた大地が顔を出す中で、球を投げ、飛び跳ね、駆け巡れるそんな他愛もないことが殊更嬉しかったように今も脳裏に浮かびます。春の陽気が気持ちを高揚させていたのかもしれませんが。

それから数十年の歳月が流れ、春を迎えると幼少の頃には意識もしなかった山菜が、こんなに楽しみで有難い貴重な食べ物として私たちの食膳に上がろうとは・・・

それはまるで体が、冬季間に体内に溜め込んだ老廃物や脂肪を抜かんがために、大地からいずる春の恵み(特有の苦みや香り)を、待っていましたとばかり取り入れるかのようです。況してやそれを我々が美味しいと舌を鳴らしながら食べられるとは、自然とはよくできたものだ本当に感心をします。

更に、秋には秋の旬であるキノコが、また、皆さんの食卓を賑やかすのかもしれませんが。

2021.4.1 花ごよみ



山口市に近い鳥羽川堤の桜並木が満開。雨や強風や汗ばむ陽気にもにもめげず、さして散ってはいません。唱歌にも歌われるように、桜と言えば堤端のイメージを浮かべる人も多いかと思いますが、水防には望ましくないようで、堤防を守るため新たな植栽の許可は出ないようです。

桜が開花すると、25日の投稿いただいた日記にあるように、山菜の季節。30～40年ほど前には、ヤマト(三田洞交差点近くにあったスーパー)か、ヤオジン(現トミダヤ)だったか、スーパーにウルリ(ギボウシの若葉)が並びました。季節によっては、玉味噌やフナ味噌など近隣の郷土食材も並ぶことがありましたが、それも今では全く見かけません。食卓に上ることがいなくなったのでしょうかね。

それにしても、今年の春はフキノトウの高かったこと。8個ほどで500円前後。やがて、フキノトウすら見られない日が来るかもしれませんね。

2021.4.5 花ごよみ・ニリンソウ



春は、花ごよみのテーマがどうしても多くなりますよね。私の大好きなニリンソウが、見ごろを迎えつつあります。この辺り、と言っても少し距離がありますが、「寺尾の千本桜」(正式には[寺尾ヶ原の千本桜](#))の近くで、群落を見たことがあります。清楚な花が寄り添う姿に、演歌は似合いません…?!

3月6日の日記には、春は黄色の花が多いとありますが、追いかけるように白い花に移ろうようで、庭のヤマシャクヤクも咲き始めました。せいぜい3～4日咲いて散ってしまいます。気難しいはずの株ですが、意外と機嫌良く毎年咲いてくれます。白い花と言えば、栗野台の周辺には、夏になると野生のユリの花が数多く見られます。種でどんどん増えていくようです。咲く時期になったら、ご紹介したいと思います。



▶鉢植えのヤマシャクヤクが機嫌良く咲きました。

2021.4.6 ノビルが美味しい



春は、山菜、野草のテーマも欠かせませんね。最近、ノビルを見かけませんが、気のせいでしょうか。自宅に植えておいたものを抜いて、八丁味噌でいただきました。春が口の中を吹き抜けます。野草や摘み草で町おこしをしている例も少なくありません([京丹波町](#)、[日本列島知恵プロジェクト](#))。

2021.4.9 玄鳥至(つばめきたる)



今年は早い時期に燕が渡ってきていた気配がありましたが、写真に捉えたのは今朝早く。朝晩はまだ冷え込みますが、元気そう。田畑もだんだん少なくなります。都会でも見られますから、結構適応力はあるそう。昔は家の中の玄関土間の天井に巣をこさえては子育てに忙しい姿を見かけたもの。扉を開けばなしていても、治安が良い時代でしたね。

2021.4.13 写真



三人で写真を撮るとき、「真ん中の人は早死にする」という迷信が、子どもの頃にありました。真ん中の人にしかピントが合わなかったからとか、年配の人を敬って真ん中にしたためとか、諸説あるようです。明治半ば生まれの曾祖母は、「魂が抜かれるから」と写真を撮られるのが好きではありませんでした。長崎で写真館を始めた上野彦馬の写真集には、坂本龍馬をはじめ、幕末の志士の肖像写真が納められていたり、当時の風俗が記録されていたりと、興味深い内容です。

ところで、古い写真は家族の記録写真が多く、まちの風景を記したものは少ないようです。郷土の古い写真をお持ちの方は、ホームページへの掲載に、ご協力をよろしくお願ひします。

一方、まちは今も姿を変えています。現在のまちの姿や人々の暮らし、行事なども、記録し、伝えていきたいですね。

2021.4.21 花ごよみ・牡丹



栗野の大龍寺のドウダンツツジの開花も終わりました。追いかけるかのように、庭では牡丹の花が咲き始めました。私の知り合いがお世話している郡上市美並町の桂昌寺の牡丹園も有名です。いずれも花の名所が地域の名所となる好例ですね。コロナ禍で遠出もためられる昨今、早くワクチンの接種が行きとどき、一刻も早い終息を願いたいものです。

2021.4.25 草花遊び



中国では車前草というオオバコ。車の通る道端に生えるという意味らしい。踏みつけられて、ほかの草が成長できない場所で、背の低いオオバコは生きのびる術を身に付けたとか。スモトリグサの別名があり、花径をひっかけ合っけて引き合い、どちらが切れるか…子どもの頃のオオバコ相撲遊びを思い出しませんか？ ペンペングサのカラカラ楽器や笹舟なども、子どもたちに教えてあげたいですね。100通りの草花遊びを収録した「草花遊び図鑑」は、メディアコスモスでも借りることができます。

オオバコ、ツボミオオバコ(写真)、ヘラオオバコの在来種、外来種の3種類があるそうですが、その小型種も見かけます。それどころか、かなりの雑種があるみたいです。咳止めとして煎じて用いた記憶があります。

オオバコは、子どもたちの多様性、生き抜く力、社会性を育むシンボルなのかも。ちなみに大葉子と書きます。

2021.5.3 「五月蠅(うるさい)」

最近、蠅を見る機会が少なくなりませんか？子供の頃、街中に住んでいたけれど、夏場になると、一面に蠅が飛び回っていました。蠅採りリボンを天井から吊るせば、結構な数のイエバエやキキンバエがくっつきました。比較的珍しい長いロート状のガラスの捕獲器は、天井に止まった蠅を捕まえるのに一時期活躍しました。各家庭には黒く塗られたリンゴ箱を使った蓋つきの木箱(コンクリート製も少数ですが見られました)に、調理くずが主体の生ゴミが納められていました。週1回だったでしょうか、大八車(犬と一緒に手伝ってひいていました)がゴミ収集に回って来ました。側面を木で囲った荷台の底から、巨大なハサミ虫が、這い出してきました。汲み取り便所や溝、放し飼いの犬のふんなど、蠅にとっては住み良い環境が整っていたのです。当時、数センチメートル高の小瓶に、蠅を詰めて保健所に持ち込むと、五円か十円で引き取ってもらえたとかで(?) 兄が苦も無く集めていました。時代は変わり、衛生環境は随分と改善されましたが、コロナ禍でも人出が増加しているのを見ると、衛生思想はむしろ退化しているのではとってしまう。

それにつけてもゴールデンウィークになると増殖するバイクの爆音の五月蠅いこと、うるさいこと。社会環境・生活環境は、本当に良くなっているの？



2021.5.5 鯉のぼり

最近見かけなくなったと言えば、鯉のぼり。子ども時代を過ごした街中では、見かけた記憶はありませんでしたが、長良川以北などの郊外では空を泳ぐ雄姿があちらこちらに見られ、子どもながらにカルチャーショックを受けました。第二次ベビーブームの頃が出荷のピークと言います。その後、郊外部でも住宅の密集化が進むとともに、共働き・核家族化で出し入れが難しくなったのでしょう。今では市内でも近隣自治体でも、まず見かけることはなくなりました。見栄の張り合いを防ぐ趣旨で禁止する条例を定めた自治体も存在するというのも驚きです。そもそも平家の落人の里では、目立つ鯉のぼりを掲げる風習がないとも聞きます。地域によっては景観を守るためなど様々な理由で禁止ないしは自粛を余儀なくされているとか。小さな鯉のぼりでも、ベランダに掲げることを禁止するマンションもあるようです。一時期、男女差別を助長するという議論もあったようです。今では[岐阜ファミリーパーク](#)や[四国山香りの森公園](#)などの公共施設でしかお目にかかれない…と思っ



ていたら、すぐ近くのお宅で泳いでいました(何か嬉しい気分)。

文化の継承は一筋縄ではいかないことを改めて感じます。江戸時代までは和紙で作られたそうです。部屋の中でも飾れる大きさで、美濃和紙でこさえた鯉のぼり(「[のぼり鯉](#)」)を継承し制作している店が[岐阜市](#)にあります。これもなんだか嬉しい。

2021.5.6 花ごよみ・オガタマノキ



天岩戸の前で舞ったアメノウズメが手にしていたと言われるオガタマノキが咲き始めました。岐阜公園には、稀な大木があります。背丈ほどに剪定した低木でも咲きますから、小さな庭にもおすすめです。畜産センターの北駐車場の階段を上った辺りにも植栽されています。近づくとリンゴのような甘い香りを漂わせます。キンモクセイやジンチョウゲのように周囲に漂うほどではありませんが、とても魅力的な香りです。

話は変わって、岩野田北公民館では、平成16年から毎年数回、[コミュニティコンサート](#)が開催されています。本物の音楽を身近に楽しめると好評で、市外からも多くの人を訪れます。

音楽や文化に触れ、花の香りが漂う環境づくりは、一人ひとりの参加・交流で進められるまちづくりの一つですね。

2021.5.8 つなぐことの難しさ



山草の乱獲を防ぐため、自家採取した種を希望者に安価に頒布するタネタネネットという活動がありました。もう20年も前になるでしょうか。世話人は一人。一部の賛同者から、種の寄付も寄せられていました。新聞でも紹介されましたが、残念なことに活動は途絶えました。これだけの取り組みを一人で続ける苦労は大変だったと思います。発芽しなければ、苦情も寄せられたことでしょうし。ここを通じて種を入手し育てたヤマオダマキが、毎年、庭の片隅で渋い花を咲かせてくれます。

投げ入れた写真の花瓶は、若い頃、佐渡に旅行に行ったとき購入したもの。手ごろな値段なのでつい買ってしまいました。[無名異焼](#)と称され、江戸時代に金山の鋳物を使って創始されました。その後、国の重要無形文化財の指定を受けています。

かつては岐阜市にも金華山焼がありましたが、継承されていません。賛同の輪を広げ、つなぎ、伝えることの難しさは、何事にも共通するテーマですね。

2021.5.15 花ごよみ・薔薇



バラの季節を迎えています。日本一のバラの苗の生産地が近くにあります。揖斐郡大野町です。畜産センターでも、毎年、届けられた苗の頒布会が開催されていましたが、豚コレラの影響？で中断。子豚やウサギの可愛い姿も見られません。追い打ちをかけるように新型コロナのまん延。岐阜県も「まん延防止等重点措置」区域への指定を受けました。さらに緊急事態宣言を国に求める方針とか。昨日からワクチン接種の予約受付が始まりましたが、年齢に加え、通院していることなどの医院での受付条件がハードルに。焦らずに待つしかありませんね。バラの季節が終わる頃には、一連の接種作業は軌道に乗るのかしらん。今年は例年より早く梅雨入りの気配です。社会の混乱とは関係なく、今年は機嫌よく咲いています。

2021.5.16 梅雨入り宣言

観測史上番目に早く梅雨入りしました。昨年より25日も早いとか。コインランドリーが混雑しそう。スーパーには、新ショウガやラッキョウが並んでいます。梅の実もそろそろでしょうか。梅の実が熟す頃の雨ということで、梅雨と聞いたことがあります。梅雨の代名詞と言えば、アジサイ。一足早く咲き始めるのがコアジサイ。薄い水色の小さな花が雨に濡れて、樹陰にもまぶしく感じます。梅雨寒の日もあり、衣服の調整が難しいですね。ちなみに今年もエコオフィスの取り組みが今月1日から始まりました。地球温暖化の影響でしょうか、暑さだけでなく、自然界と私たちの暮らしに、さまざまな影響をもたらしています。

2021.5.18 巣立ち

巣立って間もないモズの雛(多分そうだと思うのですが)、今年も庭にやって来ました。まだまだ飛ぶのもおぼつかず、親鳥が餌を運んできては与えてい正確には巣立ったとは言えませんね。巣にいるときも、この時期もカラスに狙われることも…。親鳥はキチキチと声高に鳴いて威嚇しています。餌場を争ってムクドリやスズメの集団と取っ組み合いのけんかをするものの、体も小さくて、とてもかないません。子育ての時期に幅があるようで、巣だって間もない頃の早い時期に襲来した台風で飛ばされないよう、必死に枝にしがみついた雛の姿はヒヤヒヤものです。庭に巣をつくる年もあります。逃げ場のない巣の中で、炎天下の陽射しに耐えているのを可愛そうに思い、ホースで水を空に向けて散布(余計なお世話)すると、雛を守り羽をひろげ傘になる親鳥の姿に感動したことも。巣を出てから飛び立っていくまでは特に気が休まりません。飛び立っていった後、庭は寂しく静まり返ります。写真は、左側の雛には大きすぎるトカゲを捕まえてきた親鳥。背景の網は庭のフェンスです。



2021.5.21 雨とアリの巣



避難指示が、午前 6 時 27 分に郡上市に発令されました。岐阜市でも激しい雨が降っています。避難勧告が廃止され、避難指示に分かりやすく一本化され、昨日から運用が始まったばかり ([岩野田北自主防災隊](#) | [自治会・各種団体](#) | [岐阜市岩野田北まちづくり協議会 \(sakura.ne.jp\)](#))。市内もかなりの雨が降っています。

先日、山根市の公園でクロアリの 1 巣穴がわずか 2 畳ほどの区画に 100 箇所ほど。こんなに密集している風景は初めて見ました。雨が降ると水浸しにならないの?と思う人も多いのでは。アリは雨の気配を感じると巣穴の入り口に土をかぶせて蓋をします。染み込んだ雨にも、横穴の部屋は安全らしい。とは言え、流れ込んだ土を外に運び出し、巣の出入り口の周りには写真のように盛り土が出来る訳です(雨上がりなので、湿って黒く見えます)。

2021.5.28 麦秋



「誰かさんと誰かさんが麦畑…♪」、「愛の花咲く～♪麦畑」など、麦畑って、何となくほんわかとしていて、愛が育まれる、そんな感じ? ドリフターズが歌っていた誰かさんと誰かさんがの原曲はもともとスコットランド民謡だそうで、麦畑で出会った二人はキスするだろうと歌われています。弥生時代にもたらされた麦は、わが国でも身近な作物だったのでしょう。平成 30 年の小麦の自給率は 12%(昭和 36 年に 38%)。ちなみにソバはと言うと何と 21%(昭和 37 年に 95%)。

1 月 6 日に、お隣の常磐地区の麦について書きましたが、今、収穫期を迎えています。陽が西に傾くころには、金色に輝きます。

2021.5.29 姫小判草

昨日の日記の麦はイネ科の植物ですが、路傍に生えるイネ科の仲間たちを探してみました。写真はヒメコバンソウ。一年性植物で、穂を振ると、かすかな音をたてることからスズガヤとも呼ばれます。花言葉は、「私の心に気付いて」…なるほど。すぐそばで少し大ぶりのコバンソウも黄金色の穂をつけていました。明治時代に観賞用としてやってきたそうで、今では野生化しています。花言葉は「お金持ち」。



2021.5.30 花ごよみ・茅(チガヤ)



昨日に続いてイネ科特集。今日はチガヤです。万葉集にも歌われるなど、かなり昔から親しまれた植物です。名前の由来は、群がって生える様子から、千のカヤの意味からとか。実際、屋根をふくのにもつかわれたそうです。子どもの頃、穂がまだ葉鞘に隠れているのを剥いて、ほほおぼった記憶があります。味もなく、ガムのような感じでした。おそらく一緒にいた友の誰かが、「これ食べれるぞ」と言ったのでしょ。その後は二度と口にすることはありませんでした。今になって調べてみると、「かむと、ほのかな甘い汁が出てきます。サトウキビの近縁で、糖分を蓄える性質があるからです。ガムのような感覚で甘みを楽しんだ後、味がなくなったカスは捨てます」とあります。「ただ、現代の濃い味に慣れた味覚には、もの足らなく感じるかもしれません」とも。暮らしに身近であったチガヤですが、土手焼きが行われなくなったり、土手そのものが少なくなった昨今、街中で見かけることは少なくなったような。

さて、写真の真ん中に、昨日紹介したヒメコバンソウより大粒のコバンソウが一株混じって穂をつけています。それにしても、通過交通の道路沿いの草むらには相変わらず空き缶のポイ捨てがあるのは、興ざめですね。今日は、「ごみゼロの日」。コロナ禍で、各地の活動も中止でしょうね。